

「LGBT*、私たちがいまここに暮らしている」
：現代韓国社会の性的マイノリティと空間
——レズビアン集住地域・麻浦を中心に——^{** (1)}

カン・オルム^{***}
森田 智恵 訳

訳者解題

ここに訳出したものは、강오름「“LGBT, 우리가 지금 여기 살고 있다”: 현대 한국의 성적소수자와 공간」『비교문화연구』(제 21 집 제 1 호, 2015)の全訳である。本稿は、筆者であるカン・オルムが韓国学中央研究院韓国学大学院人類学専攻在学時に執筆した修士論文をもとに内容を補完・修正し、学術誌に掲載した投稿論文である。ソウル特別市の西端に位置する麻浦というエリアを中心に形成されたレズビアン集住地域の形成過程と、その「クィアシティ」に暮らす人びとの日常的な諸実践と社会運動の様相とその意義について、筆者はインタビュー調査と参与観察をとおして論じている。翻訳にあたって、より論文の内容をあらわすべく著者の許可を得て「レズビアン集住地域・麻浦を中心に」という副題を本稿の元タイトルに加えた。注釈は、()なしの文末注が原注、()付きの頁末注が訳注である。

本稿の問題意識は、メディア空間を中心に性的マイノリティに対して「寛容的な」態度をとる近年の風潮、すなわち異性愛を主流の規範として確保したうえで非異性愛者への選別と排除を働かせるマジョリティ側の「承認の政治 (politics of recognition)」に対する批判に根差している。性別二元論と異性愛が規範化された社会において選択的に描かれる性的マイノリティの表象からは、大多数の性的マイノリティの多種多様な日常生活の様相は浮かび上がってこない。さらにこのような選別的な表象が問題であるのは、性的マイノリティのなかでも、複合的なマイノリティ性を生きる人びとの生を不可視化させるためである。人種、階

(1) 강오름, 2015, 「LGBT, 우리가 지금 여기 살고 있다: 현대 한국의 성적소수자와 공간」『비교문화연구』 21(1): 5-50. Copyrights © 2016 Institute of Cross-Cultural Studies, Seoul National University.

級、ジェンダー、セクシュアリティ、健全性、宗教といった一個人の身体を構成する諸要素はそもそも主流社会から疎外された性的マイノリティのなかでさらなる周縁性を生み出すこととかわるが、「承認の政治」はより周縁化される人びとを捨象していく。本稿が執筆されたのは2010年代半ばであるが、このことは現在の日本社会でもリアリティをもって感じられることであろう。

「LGBT、私たちがいまここに暮らしている」。本論文のタイトルにもなっているこの言葉は、麻浦に暮らすクィアたちが、麻浦がクィアシティであることを可視化させようと地域広報板への横断幕の掲載を区庁に申請した際のコピーである。行政側はこの申請を公的空間に不適切であるとしてただちに却下したが、このような対応は都市の公的空間があらゆる人びとにとって平等なものではないことをはっきりと示している。公的空間ではそこに張り巡らされた諸権力によって、空間に存在できることを許される者とそうでない者とはつねに選別される。とりわけレズビアン／ゲイ／クィアスタディーズやフェミニスト地理学が暴いてきたように、公的空間はマジョリティの規範に則って設計されており、あらゆるマイノリティに開かれてはいない。(Kern 2020 = 2022; 清水 2022)。本稿にひきつけていえば、性別二元論と異性愛主義が規範とされた社会で、性的マイノリティの人びとはさまざまなやり方で都市空間から排除されてきた。ゆえにいつそう、性的マイノリティにとってこれまでも、いまなおずっと自分たちの空間は生存にかかわって重大な位置を占めてきた。嫌悪にさらされ主流社会から疎外させられながら生きる人びとにとっては、みずからのアイデンティティにもとづいた身ぶりを遂行し、安全な生を確保できる空間が必要であるためだ。

相対的にゲイ男性たちが都市空間に商業施設を設け一帯のエリアを可視的に形成するのに対し、本稿が主題とするレズビアンの女性たちにとっては、外側からはみえないホームとその近隣地域こそが関係性を構築しセクシュアリティを表現する場所となってきた。性差別が刻みこまれた社会で社会経済的に男性より低い位置にある女性にとっては、公的空間での移動性が低く、経済的資本にとぼしく、さらにレズビアンであるという理由で暴力の危険にさらされる可能性があるためである(福田 2018)。

そのような傾向をかながみとき、麻浦というエリアが興味深いのは韓国社会特有の文脈と結びついて、レズビアンたちが中心となつてかのじょたちが集住しているクィアシティを可視化させようとした点である。本稿はクィアシティとしての麻浦が形成された歴史的経緯を、まず1987年韓国民主化までの運動の流れを汲みつつ1990年代以降に盛んとなり麻浦で広がっていた地域共同体運動と、2000年代半ば以降にフェミニズム運動団体が一挙に麻浦に流入してきた点に求めている。さらにはもとより麻浦がレズビアンたちの遊び場として認知されていた点や繁華街となった弘大を中心に多様な属性の人びとが寄り集まる空間であっ

たことも影響していたと指摘している。これらの流れが結びついた地点に、クィア地域共同体およびクィアシティ形成の契機があった。

このようにクィアが麻浦に集住するようになった背景にはつねに権力の作用と、それに対する人びとの抵抗の諸実践が内包されていた。その様相は、偏在的にのしかかるジェントリフィケーションと性的マイノリティたちへの嫌悪に対するクィアたちの闘争だったといえる。ただし重要なのはクィアたちだけの運動が、クィアシティの形成を促したのではないということだ。本稿が描くように、麻浦のクィアたちは地域に巨大資本のスーパーマーケットが建設される際には在来市場の商人たちとともに反対の声を上げ、また麻浦に定着していた地域運動とも日常的に結びついていた。麻浦はしだいに多様な属性をもつ人びとが共闘する場となっていた。このようなさまざまな人びとの共存が、抵抗の連環が、クィアたちによる可視化への試みを支えていたのである。

2023年現在、麻浦はいまなおクィアシティの様相をみせている。しかし人びとを土地から引きはがし外へ外へと放逐するジェントリフィケーションの波はとどまらない。本稿でも言及されているように、本稿が執筆された2015年時点でもすでに麻浦から流出する人びとは増えていたが、いまや麻浦区の北部に位置する恩平区や西部の京畿道高陽市に居を移すレズビアンたちも少なくない。近年全世界で急騰する不動産価格の上昇は文在寅政権下（2017～2022）においてもはっきりと現れ、それが政権交代の一因となるほどに都市部に暮らす人びとに多大な不安と不満をもたらした。ソウルはもはや誰しもにとって韓国特有の不動産契約のシステム上巨額なローンなしには容易に暮らせる都市ではなくなっているが、ローンの貸与条件から外れる場合が多い非婚で女性のレズビアンたちはその影響をより強く受けているといえる。著者が参与観察していた団体「麻浦レインボー住民連帯」も、2018年前後に活動を休止している。さらにはCOVID-19の感染拡大は住民間の活動や集まりを縮小させることとなったが、麻浦を離れることは、そこに暮らすクィアたちにとっては避けたい決断であり続けている。

このような状況に抗する、クィアシティの運動の流れを汲む諸実践が異なるかたちで継続されている。たとえばクィアの暮らしをめぐる諸問題について研究と現場での活動を架橋しまとめあげられた提言が社会運動団体ネットワークから提出されており、住居をめぐる既存のシステムに亀裂を入れる試みがおこなわれている（성소수자 주거권 네트워크 2021）。そしてそもそも、クィアが集まって暮らすことは、「家族」とは何かを幾度も深く問うこととともにある。この社会でみずからが主体的に「家族」を構成する権利は、誰しもに等しく与えられているのだろうか？ そうでないとするれば、それはなぜなのか（김순남 2022）？ このような問いを考えるうえで重要な取り組みも、麻浦ではじめられている。麻浦のなかでもさ

らにクィアたちの集住率が高い望遠洞で、15人の多様な性的マイノリティの人びとが一棟の「虹の家」を2016年に建設し、5匹の猫とあわせてともに暮らしはじめた。居住者の入れ替わりはありつつ、そこでこれまで生活を営んできた人びとはその記録を本として出版し、既存の家族制度とは異なる暮らしのあり方を提示している(김현경외 2022)。麻浦というクィアシティに端を発するこのような多様なかたちでなされる諸実践は、既存の都市空間や家族制度に対する先鋭な問いを韓国社会に投げ続けているのである。

参考文献

- 福田珠己, 2018, 「ホームの地理学とセクシュアリティの地理学が会うとき——近年の研究動向に関する覚書」『空間・社会・地理思想』21: 29-35.
- Kern, Leslie, 2020, *Feminist City: Claiming Space in a Man-Made World*, London; New York: Verso. (東辻賢治郎訳, 2022, 『フェミニスト・シティ』晶文社.)
- 김현경, 나영정, 정현희 엮음, 가족구성권연구소 기획, 2022, 『여기는 무지개집입니다』오월의봄. (김ム・ヒョンギョン, 나・ヨンジョン, チョン・ヒョニ編, 家族構成研究所企画, 『ここは虹の家です』五月の春.)
- 김순남, 2022, 『가족을 구성할 권리: 현연과 결혼뿐인 사회에서 새러운 유대를 상상하는 법』오월의봄. (김ム・スンナム, 『家族を構成する権利——血縁と結婚だけの社会で新たな紐帯を想像する方法』五月の春.)
- 清水晶子, 2022, 「ようこそ、ゲイ・フレンドリーな街へ スペースとセクシュアル・マイノリティ」菊池夏野・堀江有里・飯野由里子編 『クィア・スタディーズをひらく2 結婚, 家族, 労働』晃洋書房, 41-64.
- 성소수자 주거권 네트워크, 2021, 「성소수자, 주거권을 말하다」. (性的マイノリティ住居権ネットワーク, 「性的マイノリティ、住居権を話す」.)

1. 問題提起

韓国社会で同性愛者をはじめとする性的マイノリティに関する言説が活発になってから二十余年が流れた。その間、韓国社会での性的マイノリティに対する認識は急激な変化を経験したようである。「ホモ」や「同性愛者」のような表現で呼ばれ〔HIV /〕エイズ感染拡大の主犯という程度に認識されていた過去と比較すれば、「女よりかわいい」トランス女性あるいは気配りに長けスタイリッシュな趣向のゲイ男性のイメージがテレビ番組や映画のようなメディアで頻繁に登場するようになり、ときには肯定的に受容される今日、性的マイノリティの生を認めなくてはならないことは一見「政治的な正しさ」という常識になっているようにみえる。

このようなメディアが作り出す性的マイノリティに対する「寛容的な」態度、つまり承認の政治（politics of recognition）に対する批判から筆者の問題意識は出発する¹。メディアという空間で性的マイノリティは、「スタイリッシュなゲイ」のような独特な傾向の所有者およびそれによる新たな商品の創出者、あるいは一種の個人的な趣向として「配慮」されなければならない対象として映し出されている。このような配慮や寛容はかれら／かのじよらを、生活スタイルを選択した消費者であり私的な空間に属した存在としてみなし、さらには隔離する戦略になりうる（서동진 2006）。異性愛が主流の規範として確固たる位置にあるにもかかわらず、公的空間は価値中立的な空間とみなされ、異性愛の優位性および非異性愛に対する排除と選別の権力は秘密裏に了解されるようになるのだ。さらに一部のゲイ男性のイメージが性的マイノリティ全体を代表するかのよう表象されるとき、女性の性的マイノリティの存在はいつそうぼやけることになる。つまり日常的な空間で暮らしている、メディアで生産されるイメージとは相容れない大多数の性的マイノリティの生は、「承認」の範疇から排除されているのである。

このような問題意識から筆者は「性的マイノリティ」という主体にアプローチするとき、それについて一般的に期待されている特定のイメージあるいは私的で閉鎖的な空間よりは、社会全体のコンテクストのなかで性的マイノリティのアイデンティティが有する意味、そのようなアイデンティティをもつ人びとの実践に注目しようとした。「空間」に対するアプローチは、このような模索のための方法になりうる。空間はいつでも人類学者たちにとっておなじみの概念であり、自然景観あるいは日常生活における物質的条件など空間に関する分析は、しばしば理論的主張を支えるものでもあった。だが次第に人類学者たちは空間を単純な背景

として捉えるというよりは文化の空間的側面を全面化するものとして着目点をうつしつあり、あらゆる行為が空間のなかに位置し構成されているという観点は新たな意味をもつようになった (Lawrence-zúñiga and Low 2003)。なによりも、特定空間を利用することで人びとは自身のアイデンティティと他人をカテゴリー化するようになるが、性的マイノリティのアイデンティティはそのようなセクシュアリティが形成されるために特定空間に依存するという側面において、本質的に空間的なものである (Mitchell 2000; 발렌타인 2009: 15)。レズビアンとゲイのアイデンティティの遂行 (performance) をとおして、異性愛を当然視する空間はレズビアンとゲイの空間として (再) 生産され、性的マイノリティのアイデンティティが確立されうる環境が提供されることになる。したがって今日、韓国での性的マイノリティの位置を理解しようとするとき、性的マイノリティが自身のアイデンティティを遂行し存在をさらそうとする場として、そしてこのような遂行による生産が広がる場としての空間から、議論をはじめめる必要がある。とくに筆者は女性の性的マイノリティの空間に注目しようとする。性的マイノリティという範疇のなかで、ジェンダーによる差異がはっきりと表れる部分は空間占有の問題だ。女性の性的マイノリティは非倫理的で逸脱した存在としてみなされる点、また依存的で軟弱で保護が必要な存在として規定されるという点で、公的空間の利用から排除される (맥도웰 2010)。このように二重の制約をうける位置にある女性の性的マイノリティたちによる空間を占有しようとする能動的な実践を検討することは、ジェンダーおよびセクシュアリティに対する韓国社会の反応の一側面を把握し得る事例になるだろう。

本研究ではソウル特別市麻浦区での性的マイノリティによる地域運動の事例を中心に、空間と性的マイノリティの関係性および政治的な主体としての性的マイノリティの能動性について明らかにしようとする。現在の韓国社会でゲイの産業地区が最大の規模で形成されている鍾路や梨泰院と異なり、麻浦の場合レズビアン女性たちを対象とする店舗は可視的な景観を形成してはいないが、性的マイノリティの居住地として、そして日常生活の空間としての役割を果たしている。これが麻浦が性的マイノリティたちの政治的な場として構成されるにあたっての重要な要因となっている。性的マイノリティが空間をとおしてアイデンティティを形成していく過程を追うために、本研究は第一に麻浦での性的マイノリティの共同体が作られる以前の性的マイノリティと空間の関係についての歴史を描き、第二に麻浦という特定地域がどのように性的マイノリティを取りこむようになったのかを分析し、第三に性的マイノリティが行為者としてどのように麻浦というエリアにクィアのアイデンティティを与えているのかを跡付けていく。

2. 理論的背景

ミシェル・フーコーは現代の西欧に存在している「性」という範疇とそれに対する仮定が自然なものであり、必要不可欠なものだとする主張に問題を提起することで性に対する歴史的アプローチを発展させた。フーコーは『性の歴史』(2004)でセクシュアリティ (sexualité) の規制によりセックス (sexe) の範疇が生み出されると主張する。過去にもソドミー (sodomy) のような多様な性行為があったものの、近代の心理学的、精神医学的、病理学的カテゴリーは同性愛を性関係のひとつのかたちとしてというよりは、むしろ性的感性の特性として成立させていた。性は実体があるものでなく、多様なセクシュアリティを包括する上位カテゴリーとして発明されたものであり、規律的な慣行をとおして一貫した性的アイデンティティとして生み出される。このような歴史的構成をとおしてセックスはジェンダーを規律する原因であり自然的な性として位置を占めるようになり、それが構築的なものであるという事実は覆い隠される。セックスという物質化されたカテゴリーによれば、生物学的にすでに決定された男性と女性という両性だけが存在し、人びとは異性愛を欲望するように期待される。したがって、このような規律的なセクシュアリティに属さない両性具有者、異性愛を欲望しない者は性倒錯者、怪物、非正常者としてみなされる。フーコーは異性愛にもとづくセックスが実際は自然の秩序ではなく、権力と知識と欲望のミクロポリティクスにより性の諸カテゴリーがかたちづくられるようになったと明らかにした。

だがフーコーにとって、権力は基本的に関係的な性格を有しているという点を想起する必要がある。これは個別の主体の選択または決定に由来するものではなく、多様で差別的な力の適用をとおして広がっていく。したがって、権力の適用にはすでに抵抗の可能性が内包されているのであり、権力関係の網が機構と制度に張り巡らされていながらも、そこにのみ限定されない稠密な組織を形成するように、抵抗の地点の移動は社会階層と個人の重なりを貫通する。フーコーはこのような抵抗の地点の戦略的コード化が革命を可能にするともっている (ibid.: 104-106)。19世紀後半以降「同性愛者」という用語の拡散は、他方では抵抗の可能性を内包した権力の作用だった。これと同様に1960年代アメリカで「ゲイ (gay)」という自己解釈の登場が広範囲に及んだことは、政治化された性的アイデンティティの台頭を表していた (ウクス 1994: 110-112)。このような20世紀以降の特有な性的なサブカルチャーやコミュニティの登場は、カテゴリー化とセルフラベリング (self-labeling)、つまり社会的アイデンティティをつくり出す過程をもって統制と制限および禁止を生み出しもしたが、同時に「慰めと安定そして自信」を植えつけもした (Plummer 1980: 29)。1960年代後半「ゲイ解放主義者たち」が政治勢力化し、1970年～80年代ニューヨークとサンフランシスコでは、アメリカ

のゲイおよびレズビアンの大衆的な運動を主導する共同体が現れた。以降、地域の条件が許可される場所であればどの国においても、これにならった多様なゲイ解放運動がみられるようになった (웁스 1994: 113)。

では、特定のアイデンティティを基盤にした共同体が形成される地域的条件は、いかにつくられるのか? ブルデュー (Bourdieu) は、実践 (practice) が空間に文化的知識と行為を注入し強化する相互依存的な方法に注目する。かれによれば、空間は実践とかけ離れてはいかなる意味もなさないものであり、体系の生産的で構造化する気質であるハビトゥス (habitus) は空間を構成したり、行為者の振る舞いにより空間のなかで構成される (Bourdieu 1977: 214, Lawrence-zúñiga and Low 2003: 10 [より] 再引用)。ブルデューの理論によれば、社会的実践は空間的意味を作動させるため、特定のアイデンティティは空間で固定されるものというよりは、行為者たちがつじつまが合わない知識と戦略的意図を空間的意味の解釈として持ち出してくる時に発動してくる。つまり空間は、「人びとが日常的に利用する行為のために、物理的環境が象徴的な意味をもつ場として変換」(박지환 2005) される。

空間のなかでの性的アイデンティティの遂行 (performance) を説明すべくバトラー (Butler) の議論を引いているヴァレンタイン (Valentine) の研究は、行為者の振る舞いによって空間が構成されていることをみせてくれる。バトラーはジェンダーを、そして暗黙裡に別のアイデンティティも遂行的なものとして理論化し、これを厳格に統制された体系のなかで形成された反復的な行為の集合であり、時間を経るにしたがって本質、つまり自然的存在の外形を凝固させるものだと主張する (비틀러 2008)。ヴァレンタインは、このような視角が社会的アイデンティティを連続的な闘争の対象であり、不安定なカテゴリーであると考えさせ、このような遂行と闘争が日常空間でどのように立ち現れるのかに関する研究を可能にしたとみている (발렌타인 2009: 14-15)。性的マイノリティに対するこのような研究は、レズビアンとゲイは公的空間で自身の性的アイデンティティを意識的に遂行することで、いかにして街が「自然に正常な」異性愛的空間として生産されたのかを暴く (ibid.: 16)。

本研究があつかう「クィア²シティ」である麻浦は、性的マイノリティ、そのなかでもレズビアンたちが麻浦という特定の地域で出会うようになったという点において、かのじよたちの実践が意識的に論理的な一貫性を追求しなくても、相互に調和している事例であるといえる。かのじよたちの意識的な実践が介入せずとも、麻浦は特定のアイデンティティをもつ人びとの社会的地位と生活様式とが重なり合う場所となった。つまりハビトゥスが行為者たちの振る舞いによって空間のなかで構成されているのだ。このように無意識に立ち現れた結果物、つまり麻浦のクィアネットワークは日常が実践されるようになる原動力であり、「抵抗の地点の戦略的コード化」を可能にする。

3. 研究方法

筆者は2011年7月、偶然にも麻浦区と性的マイノリティの関係について知ることになった。その後、11月には麻浦区の性的マイノリティ住民の会である麻浦レインボー住民連帯（以下、麻レ連）に加入し、12月に初めて訪れることとなり、研究対象として麻浦という地域を認識するようになった。2011年7月、筆者は知人たちとの集まりのため、麻浦区域山洞に位置する「民衆の家⁽²⁾」を訪れる用事があった。弘大前で麻浦09マウルバス⁽³⁾に乗った研究者は、バス内広告を介して麻レ連を知った。「こんにちは。私たち望遠市場で昨日も会ったじゃないですか！ つぎに会うときには、あいさつしましょう」という広告をみて、実は麻浦エリアに性的マイノリティが暮らしているのだと知らせる広告内容に興味を覚えた。広告の端に書かれた麻レ連のインターネットカフェのURLをたどって加入し、毎月開かれる集まりに参加するなど、会員として活動するようになった。

毎月の集まりに出席しながら、「クィアシティ」としての麻浦に関心を抱くようになった。もとより新村や弘大地域を中心にレズビアンバーなどがある事実を知ってはいたが、レズビアン関連の店舗の存在だけでこの地域を有意義な研究対象とするには難しかった。一時的な出会いの場で有意義な現象をとらえるのは容易なことではないように思われたし、なによりもゲイ男性たちの鍾路と梨泰院と比較すれば規模が小さいという点で、バーとクラブなどがレズビアン全体のコミュニティで占める比重はそれほど大きくないように思われた。だがクィアアイデンティティをもつ人びとが日常的な生活の場として、ネットワークを形成する場として占有しているという点で、麻浦エリアは「クィアシティ」という性格を有しているようであった。

筆者は2012年9月から2013年8月まで集まりを率いる役割を果たしている「当番」に所属し、本格的に麻レ連の活動に参加するようになった。麻浦区からかなり距離のある場所に住んでいた筆者は、当初はクィアな住民たちと日常的に会うことが難しかったが、当番になって以降は他の当番をはじめとする麻レ連の会員たちとの連絡をとおして、麻レ連と関連する行事と出来事をより間近で観察することができるようになった³。筆者は麻レ連の定期的な集会である「クィアな食卓」と、集会のまえに当番同士で食卓のメニューとその日のイベントなどを話し合う当番会議、そして麻浦区庁と対立した際に招集されたクィア住民会議など、

(2) 2007年に発足。19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパ全体で生まれた社会主義および労働者たちによる運動組織「民衆の家」をモデルにしている。とくにスウェーデンの事例を参考にした麻浦の「民衆の家」は、地域の社会運動団体を結ぶハブとしての役割を果たす性格をもつ組織であった。

(3) 主要バス路線の補佐的役割を果たすバス路線。

麻浦エリアでの集まりに参加した。とくに、2012年の後半に予期せず起こった麻レ連と麻浦区庁との対立では、一連の流れについてその都度 SNS で共有し、他の会員たちや活動家たちと麻浦区庁前に抗議訪問に行くなど参与観察をするにあたって、「参加」という点により重きを置いた。筆者はこのような活動のなかで起こってくる状況を注意深く洞察し覚えておき、後に記録する方法を主としたが、人びとの間での会話は可能な限り、片手間に書きとるように努めた。

参与観察また参加するなかで、非公式に聞いては得られない情報については公式なインタビューもまたおこなった。筆者は2013年2月から3月にかけて、9人の情報提供者たちと深層インタビューをおこなった。インタビュー時間は短くて40分、長ければ1時間30分ほどで、すべてテープレコーダーを使用し録音した。情報提供者たちは全員麻レ連で活動する会員たちで、レズビアンまたはバイセクシュアルの女性たちである⁴。情報提供者たちの年齢は30代前半から40代前半に分布しており、職業は市民団体活動家、会社員、公認仲介士、大学院生などである。30代初めから半ばのインタビュー対象者は当番をはじめ、積極的に参加している人のなかから選定した。とりわけ、活動に積極的な会員の年齢層である点もまた考慮した。40代の場合、韓国で同性愛に対する言論が初めて現れた時期が20代にあたり、今日までの変化を生活のなかで体感してきたという点から選定することとなった。公式にインタビューした人びとと参与観察のなかで会話した人びとに言及するとき、すべてに仮名を用いた。

また過去の性的マイノリティコミュニティと関連する文献調査のため、韓国性的マイノリティ文化人権センターが運営しているクィアアーカイブ「クィアラク」に協力を得て資料を閲覧した。同性愛者専門雑誌『BUDDY』をはじめとするクィアラクの資料群は研究者が直接経験し得なかった過去のクィアコミュニティの歴史と文化および内部の言論、そして韓国で同性愛に対する公的な言論が現れる頃の雰囲気把握するのに有用だった。これをとおして過去から現在までに連なる、韓国での空間とマイノリティである性的指向性の関係についての諸事例にあたることができた。

4. 空間とクィア文化

1) 都市のゲイゲッターの形成：1990年代以前

韓国で同性愛への関心を筆頭にクィアの話目が議論されはじめたのは1990年代になってからであるが、同性愛者たちのコミュニティはそれ以前から都市空間と密接な関係を持ち存在してきた⁵。1950年代のソウル・明洞にあるいくつかの劇場は〔植民地支配からの〕解放

以降、ゲイ男性たちにとって出会いの場として利用された最初の場として記憶されている。都市の中心という特性のため、明洞は「なにかの拍子にそういう性向の人たちが多く立ち寄るようになった」場所であった。当時のゲイ劇場は明洞の百貨店を挟んで形成されていたが、これは外国製品が国内に調達される過程で外国人商人たち、そのなかでも同性愛者たちの来韓が百貨店を中心に広がったことと関係があると思われる。1960年代以降の新堂洞もまた劇場および最初のゲイバーが現れはじめ、初期のゲイゲッターとして記憶されている場所である。ある時期には、乙支路の印刷工場通りが二十余のゲイバーに占領されているような様相であった。1970年代以降は鍾路に、パゴダ劇場を中心としていくつかのゲイバーが店を開くようになり、楽園商店街一帯はゲイ男性たちにとって場としての重要性をもつ場所となり、それは今日までもつづいている。多様な人びとが途切れることなく出入りし、群れによる匿名性を有している点、建物のカーテンと路地とが隠れ蓑となる都市は性的マイノリティたちが自身と同様の人びとと出会うのに、より容易で安全な場所となった⁶。

たとえたしかに目に見えなくとも、長らくかれらだけの場所の命脈を維持してきたゲイ男性とは異なり、レズビアンたちの場合は特定地域をかのじょたちだけの場所に発展させることは困難であった。レズビアンたちもまた自身のコミュニティを形成してきはしたものの、これは「伝説としてある」話である。1965年に組織された「女運会」は会員の90%がタクシー運転手で、「女性運転手の集まり」という意味でこのような名をしている。レズビアンの集まりということが知られ暗々裏に全国から人びとが駆けつけ、ひとつの集会に少なくとも1200人から1300人が集ったという。法的社会団体として認可を受けようとしたがうまくいかず、1980年代中盤に会長選出にあたって会員間の争い、会員間の貧富の格差、社会に対する意識の違いを理由に空中解散となり、以降は集まりの性格とは離れて、仲のいい者同士で関係をもち集まるものとなったという。また1970年代の明洞で「シャネル」という女性専用茶房があったが、ここで多くのレズビアンが集まっていたという。「シャネル」は大麻の摘発により2年で廃業したが、ここで出会った人びとは他の場所でアジトを形成したり、酒場を開くこともあった。このように密かに形成されてきたコミュニティは1980年代に入り、明洞が再開されるなかで解体されたと伝えられている(이해솔 1999; 한채운 2011)。

このような違いは従来からゲイとレズビアンにとって、空間を占有できる力が異なっていたことに起因する。ゲイとレズビアンは同性愛者という点でマイノリティの性格を共有しているが、同性愛者である以前に男性と女性であり、それによりそれぞれが経験する社会的現実とは異なる他ないからである。公的空間は男性の領域で、私的空間は女性の領域とみなすことで、つまり「公的空間の男性化」(류즈 2011)により、女性が享受できる都市空間における権利は制限的にならざるを得なかった(안숙영 2012: 158)⁷。男性が自身の性的指

向が一般的な人びとと違うことを悟ったとき、似た境遇の人びとを探し、自身の活動領域を押し広げることができることは異なり、女性の場合は家庭で家事労働を遂行することをかのじょたちにふさわしいものとする社会的抑圧により、すでに与えられた役割から脱しようとコミュニティを構成したり、参加したりすることはよりいっそう難しくなる。さらに女性のセクシュアリティは家庭という場所のなかで再生産機能に忠実であるときに限り、「母」として尊重される（이현재 2008: 7）。国家が法に適うものとして提示する異性愛家族の枠組みの外では女性は無性的存在としてみなされるため、私的領域から脱してセクシュアリティに関わるアイデンティティを探索する機会はことさら閉ざされていた。さらに女性のセクシュアリティに対するこのような社会的先入観はクィアな女性の存在を徹底して非可視化する。このような視線は、女性のクィアをもとより存在しないものと仮定し、「女性」⁽⁴⁾のクィアに関わる言論の形成を阻害し、人びとを孤立させる。

2) 通信媒体の発達とコミュニティ形成：1990年代以降

1990年代PC通信⁽⁵⁾という新たな情報通信媒体の出現はクィアコミュニティに多大な影響を及ぼした。PC通信を楽しもうと若い世代のゲイ男性たちは鍾路の代わりに若者たちの志向にマッチする梨泰院で同好会のオフ会を開くなか、梨泰院はしだいに新たなゲイゲッターとして知られるようになった（조선배 2003: 69）。鍾路・楽園洞の一带ではパゴダ劇場の閉館にもかかわらず、オンライン上で情報を知った人びとが断続的に訪れることで「場の形成の再強化」が起こった（이서진 2006: 85）。

だがなによりもPC通信がクィアコミュニティに与えた影響のなかでもっとも重要なのは、レズビアンコミュニティを本格的に生み出したということだ。前節で言及したようにゲイ男性とレズビアンの女性は性的マイノリティという点では共通しているが、セクシュアリティと関連したアイデンティティを模索するのを女性は男性に比して禁忌とされているうえ、空間を占有することでコミュニティを形成することが困難であるという差異を明らかにした。「その当時はPC通信もインターネットもなかったし、昔は間違ったらどうなることか、そ

(4) 本稿が執筆された2015年当時の韓国社会での性的マイノリティにかかわる言論状況においては、本稿の冒頭で言及されているように主にゲイ男性についての議論が中心となっており、性的マイノリティという同様の属性とはいえ、男性に対して女性が非可視化される状況があった。さらには社会全体において女性そのものがマイノリティであるという点を再度強調するため、この女性という単語には「」を用いている。

(5) 通信社が提供する電話回線をとおして、掲示板等に接続し個人PC間でコミュニケーションをおこなうサービス。韓国社会では1990年代初頭にPCが一般消費者向けに商品化され普及するなかで利用者が急増し、3つの主要通信社を筆頭に利用者の関心にしたがってさまざまな集まりが形成された。

れ（訳注——性的マイノリティに対する偏見）がかなり強かったし、そういう人たちが私の他にいるか、そういった情報がまったく共有されてなかった…L（レズビアン）だったり、こういう言葉自体も知らないときだったから」（チェ・ドンミ／女性／43）。

このようなときにPC通信はレズビアンたちにとって、解放口のようなものだった。とくにフェミニストの集まりで生み出されるレズビアニズム、性政治、クィア理論などがレズビアンコミュニティにも伝達され、共有し学習された。当時の性政治とフェミニズムに関する議論は大学周りを中心に活発になった。就職活動中の学生や会社員は近づきづらかったものの、同好会に所属した人びとはPC通信上でこのような理論と論争に接することができた（한채윤 2011: 108）。女性という位置にあるレズビアンにとって、アイデンティティは男性のクィアよりも個人的なことを超えて議論できる部分が多かった。PC通信での出会いは交際に至ることもあったが、断片的な出会いに終わらずにクィア文化の生産と以降の政治的な動きの原点としてのコミュニティの形成に大きな役割を果たした。PC通信のクィア同好会で出会った人びとは「自然と人権運動もするし、クィアパレードもそうだし、その当時通信社ごとにつくられた集まりでも連合があって一緒に集会に行ったり」（ソ・ユギョン／女性／36）という過程をとおして、クィアアイデンティティをもとにした連帯感をもって活動をおこなうこともあった。当時PC通信での同好会で活動を「たくさんしてみたところ」、オフラインの人権団体の会議で参加するようになり、いまでは人権運動でよく知られる活動家になった人もいる（ヤン・スンヨン／女性／43）。

性に関する言説の拡散および同性愛者人権運動の開始、通信媒体の発達により女性のクィアの存在が可視化されはじめ、1990年代半ば以降人びとが集まれる物理的な空間もつくられるようになった。1996年5月10日麻浦区で韓国で初めてレズビアンバーを掲げた「レスボス」が開業した。これを記念して、三大PC通信同性愛者の集いのレズビアン連合が開かれた。最初のレズビアンバーが開店したエリアという点で、以降も麻浦区はレズビアンの空間という象徴性を有するようになった。以降同年7月には梨泰院でふたつめとなるレズビアンバー「ラペル」が、1997年には新村で「ショノ」と「ラボリス」が開店し、レズビアンバーは4か所まで増えた。これらのバーは飲酒代の一部をレズビアン人権運動団体の支援金として寄付することを明示してあったり、クィア関連イベントや公演、結婚式場として活用されるなど、レズビアン文化と人権運動において重要な場となった⁸。

2000年代以降、インターネット専用線とコンピューターの普及率が高まるや、大型ポータルサイトでオンラインカフェサービスが台頭し、仮想空間で集まりをもつことがよりのやすくなった。多くの人びとが安価で匿名性が保障されているインターネットに移動し、クィアコミュニティの量的な成長に寄与した。また次第に鍾路や梨泰院や新村と弘大のような「拠

点地域」ではない場所でも、ちらほらクィアたちを対象としたバーが開店する様相をみせはじめた。これはインターネットの発展にしたがい、コミュニティで活動する人びとが多くなり、私的な親睦を深める集まりが増加したことと関連し、自身が暮らす地域と近しい「近所^{トシネ}」⁽⁶⁾で気軽に人びとが会おうとする欲望をもつようになる段階に到達したとみることができるといえる。

このような現象に対し一部の人は「たとえ出会いが持続的なものとなり、コミュニティの空間を利用したとしても、それがプライベートにこっそりと継続されるという点で共同体的なコミュニケーションを形成する可能性を提供するコミュニティから、また、パブリックな生からの後退」(이승희일 1999, 조미나 2001: 36 [より] 再引用)を示唆するものだと批判した。地域の小さな集まりの増加は、韓国社会の文脈のなかでクィアな文化がより可視性を帯びるような状態には至らなかった。インターネット上で「その辺り一帯にいるらしい、そこにもレズビアンバーがあるらしい」という噂がささやかれるなかで明らかになったことは、クィアたちが特定地域に集中しているのではなく、「実際には私たちはどこにでもいる」(ヤン・スンヨン/女/43)ということだ。したがって、クィアたちが特定の地域に集中することでクィアアイデンティティを発露する場として活用する可能性、とくに日常的な生活の空間として特定地域が自然と生まれるようになる可能性はいつそう縮められたように思われた。だが2000年代中盤以降、消費空間として一時的に利用する「ゲイゲッター」を飛び越えて、よりクィアの日常生活と連なる「地域」に関する切実な悩みが現われはじめた。

3) 地域を考えること

「アメリカもそうだし、LGBT ストリートが都市ごとに形成されているじゃないですか自然と。そういうのが気になって」(チョ・ユンジュ/女/36)。『クィアアズフォーク』と『Lの世界』のようなアメリカドラマに登場したクィアたちの生は、韓国のクィアたちに韓国でもクィアたちが集住する街について想像するように促した。だがクィアたちが集まって暮らすエリアに対する漠然とした想像を現実化するには、なによりも韓国社会の文脈で発展してきた地域共同体運動と性的マイノリティ人権運動が結びつく地点がなくてはならなかった。それは「地域運動」ないしは「地域単位」という言葉が人びとの間でしだいに広がり、性的マイノリティ人権運動活動家のあいだでも「私たちも地域を結びつけられるんじゃないか」という問いが出てきてからのことだった。

韓国で地域を基盤とした運動、とりわけ都市を背景とした運動は、1960年代末に都市貧

(6) トシネ(동네)は地元、町内や近所のような意味合い。本稿でしばしば登場する概念だが、以降の文脈上シティや地域と訳出した箇所もある。

民の居住地である「タルトンネ⁽⁷⁾」を数多くの社会運動家・宗教家・芸術家たちが都市共同体運動の本拠地とし、多様な共同体的実験を試みたことから始まった。また、再開発事業と強制退去に対抗する都市貧民たちの抵抗運動は、1980年代の民主化運動の流れと結びつくこともあった(정규호 2012: 13-15)。民主化運動以降の1990年代は、ソウル外郭エリアを中心に経済的活動と生活を共有する共同体をつくらうとする自活共同体運動が台頭した。地域の解体や運営の未熟さなどの要因から失敗することもあったが、いくつかの地域ではこのような運動の成果から地域共同体運動に発展した。地域共同体運動が活発になり、地方自治体実施⁽⁸⁾以降地域の環境、教育、政治事案と開発などに積極的にかかわる地域自治運動が活発化する事例もあった(박인권・이선영 2012: 24-25)。だが国家は、市場に対する国家介入の縮小、市民社会に対応し提供する社会的サービスの縮小といった新自由主義的な要求に応答した。このような環境下で市民社会が国家と緊密な協力関係を保つことは、困難なことであった。社会経済的なセーフティネットが確保されづらいなかで、このような状況への対抗として雇用と福祉のような生活上の問題を解決するのに都市共同体が活用された。このような共同体運動は国家の官僚体系や市場の自由経済体制と異なる価値をもつ代案的モデルをかたちづくるのに注力した(정규호 2012: 16)。人権運動活動家のあいだでもやはり、しだいに政府との協調は期待できないという考えが広がり、地域を基盤にした日常的なレベルでの変化を追求しようとする試みが起こるようになった。

また2007年から2008年にかけての時期は、韓国の性的マイノリティ人権運動の歴史で重要な事件が起こったときである。2007年法務部の差別禁止法制定案立案の予告に対し、保守系キリスト教は性的指向の問題を性別や障がいといったカテゴリーに分類することはできないと主張した。最終的に性的指向を含む7項目⁽⁹⁾が削除されたままに法制処⁽¹⁰⁾の審議にかけられた。これに対し一部の人びとは差別禁止法ではなく「差別助長法」などとこれを名指し、削除された7項目と救済措置の復元を要請するなど問題提起をおこなった。この当時性的マイノリティ関連の33団体が「差別禁止法と性的マイノリティ嫌悪および差別制止のための緊急共同行動」を率いて活動をおこない、このような過程を経るなかで各団体がマイノリティが直面する差別がすべての問題なのであり対応しなくてはならないことを認識し、劇的に連帯を広げていった。以前の協議体は性別、アイデンティティ、運動の方法などの違

(7) 山の斜面など居住環境が良好でないために家賃が安く、社会階層が低い人びとが集住する地域。

(8) 1961年5月の軍事クーデターにより政権を掌握した朴正熙政権下で地方自治体が実質的に廃止されたが、87年民主化以降に地方自治法が復活し地方選挙も再開された。

(9) 削除された7項目はつぎのとおり。家族形態及び家族状況、犯罪及び保護処分の前歴、病歴、性的指向、言語、出身国家、学力。

(10) 日本の内閣法制局に該当する行政機関。

いを容易に克服することができず、2年以上維持できずに解散となった。だが「緊急共同行動」を引き継いだ「性的マイノリティ差別反対レインボー行動」は2008年1月に協議がおこなわれ公式に発足し、いまでも活動を継続している。

2008年4月9日に実施された第18代総選挙では、差別禁止法制定に対する共同行動で芽生えた性的マイノリティの政治勢力化が可視化される動きが見えはじめた。「緊急共同行動」で活動していたチェ・ヒョンスクの国会議員選挙出馬がそれである。「離婚レズビアン女性」であることをカミングアウトしたチェ・ヒョンスクはマイノリティを代弁する進歩新党の「象徴的候補」として「政治一番地」鍾路区で出馬した。鍾路がゲイたちのエリアであることもまた、レズビアン候補のチェ・ヒョンスクの象徴性を後押しした。チェ・ヒョンスク陣営の選挙活動には当初、性的マイノリティが遊説というかたちでその存在を可視化させつつ政治の主体として立ったという点で、以降に連なる性的マイノリティの政治勢力化運動の養分となったことに意義をみだせる。他方で、直前の闘争で抱えた諸問題をより深化させるきっかけともなった。「わたしたちにとって鍾路はゲイのゲットーではあるが、それは実際にはわたしたち側の考えであって、鍾路にいる他の人びとはそうは考えていなくて…鍾路にはたしかに多くのゲイたちが集まっているけれども、問題はこのゲイたちがここに遊びにくるのであって、ここに投票権があるわけではない、有権者として参与することが全然ダメだということを知ったんです」(ヤン・スンヨン／43)。空間を占有するためにはなによりも、その地域の「有権者」という地位が必要だと認識するようになったわけである。

2009年1月に起こった龍山4地域南日堂火災事件⁽¹¹⁾もまた、性的マイノリティ人権運動コミュニティ内での「地域について私たちが真剣に頭を悩ませなくてはならない」という問題意識を共有する契機となった事件だ。「龍山を見ながら…都市開発という論理のもとでその地域に根差していた生が根底から揺るがされるということを目の当たりにしたとき、私たちのように地域色が強い集団は他にないのに…ゲイたちのあいだで鍾路が再開発されたとき、楽園商店街が再開発されたとき、これがゲイたちに及ぼす影響はどういったものがあるか…」(ヤン・スンヨン／女／43)。公権力により生の基盤を無力にも引っこ抜かれることは、性的マイノリティたちにとっていっそう特別な意味をもって実感された。性的マイノリティのコミュニティは以前から「どこどこでそういう人たちが集まっているらしい」という噂をとおして特定地域を中心に形成され、たとえインターネットのような通信手段が発達し出会いの場が多核化される現象が現れても、鍾路や梨泰院のような特定地域は変わらず多くの人

(11) 2006年以降龍山で再開発事業が推進され、立ち退き対象とされた人びとはこれに抵抗していた。2009年1月の警察による最後強制退去と制圧に対し、籠城した撤去民が火炎瓶等で応戦、その過程で火災が発生し、6人が死亡23人が負傷した。

びとが集まり、人権団体活動も広がるなど、それ自体として象徴性を有しているためだ。性的マイノリティにとって、物理的空間がなくなってしまうこと、つまりコミュニティの解体は諸個人が自身のアイデンティティを表出する機会を奪われることであり、さらには存在を否定されるのと同様のことである。

このように性的マイノリティの人権運動のなかで「地域」が重要なキーワードとして浮上るようになった。「地域運動をしていた人たちがいるじゃないですか。その成果が目に見えて現れはじめて…性的マイノリティの運動でそのような地域運動にキャッチアップしたのはちょっと遅かった」(ハン・チェユン／女／43)。2008年から麻浦区に居を構える市民団体・韓国性的マイノリティ文化人権センター代表を務める活動家は、地域に基盤を置く運動に注目し、地域運動が「性的マイノリティ運動の幅を広げられないか」(ハン・チェユン／女／43)という期待をもって、麻浦に移転することとなったという。このようななか、当時関心を寄せられた事例がある。2006年9月に発足した麻浦・龍山・西大門区のレズビアンたちの地域コミュニティである「マヨンソ」^{麻龍西}が、それである。麻浦・龍山・西大門の頭文字から名づけられたマヨンソは従来の一度限りの出会いとは異なり、近所で日常生活を共有できるレズビアン^{レズビアン}の友人と出会い、交わることを目的としてつくられた。従来の集まりが主に恋愛を基盤としていたとすれば、マヨンソの場合は恋愛よりは「ラクな高校のともだち」あるいは「姉妹」のような関係を構築することを目的とする。マヨンソの「家族のような雰囲気志向」する性格は、「即席のホームパーティー」^{チブホバン}という形態の集まりによく表れている。ラフな服装で会って「たがいに家族となる時間」をもつのである。父母兄弟といった血縁の家族から独立しているマヨンソの会員たちは、たとえ血縁関係がなくとも、同じアイデンティティをもとに連帯感を共有する新たな「家族」を構成しようとする。家で同じ時間を過ごすことで、一人暮らしをしているひとが家という空間にいるときに感じる孤独感を解消することも、このような家族の役割である。たがいに「家族」になることは、情緒的な安定感のみならず、一緒にいることで一人暮らしの女性が直面しうる危険を防止する機能もある。その他にも周辺施設や不動産などの地域情報を共有することとおして、各自の趣向にあう発展的な小さなグループをもつこともある。マヨンソはこのような集まりを長期的に持続するということを目標としながら、レズビアン同士で会い「建物をひとつ建てる」「友情を維持しながらひとつの街で老いていきたい」、つまり「マヨンソシルバータウン」の建設を想像する⁹。たいていの場合、同性愛者というアイデンティティは、「家族」に対する拒否、親族から距離を置くことをとおして描かれる。だがクイアコミュニティでのこのような友情に端を発する親密な関係は「疑似親族 (fictive kinship)」の事例として認めることができるだろう (Weston 1991)。

マヨソの活動はたとえ積極的な大きな社会的運動として現れることはなくとも、それぞれの会員が自身を特定の「地域」に暮らしているクィアとして自認しているという点とこれを基盤として日常生活を共有する持続可能な共同体を構成しているという点で、新たな変化の兆候を表しているともみることができる。またマヨソの活動地域がレズビアンをあいで拠点となる地域として知られている弘大・新村と重なることもまた注目すべき事実だ。したがって、次節では麻浦というエリアがどのような面でクィアたちを引き寄せたのか、その要因を検討したい。

5. クィア空間としての麻浦区の誕生背景

1) 想像された領土「麻浦」

麻浦区はソウル中西部漢江北側沿岸に位置し、東に中区南部と龍山区西部が接しており、西は高陽市と境界をなし、北は新村道および水色道を境界線とし西大門区および恩平区と隣接している。また南は漢江をあいに挟み、永登浦区と江西区に面している。だがクィアな住民たちが自身たちの拠点として日常的に「麻浦」という名前に言及するとき、クィアたちの麻浦はこのようなソウル市の行政単位としての麻浦区とは一致しない。麻浦区でもクィアたちが好む地域は、「汎弘大圏」つまり弘益大入口と近隣の合井洞、望遠洞だ（チェ・ドンミ／女／43）。さらには麻浦の範囲を「弘大近隣、望遠、合井、新村くらいかな？ 新村から梨大のあたりまで」と設定するひともあった。クィアと縁が深い地域ではあるが、厳密に言えば、西大門区に位置する新村・梨大地域を「麻浦」の範疇に含めていたインタビュー参加者はむしろ行政地域上では麻浦区に部類される孔徳洞は排除する立場をみせた。「とにかく、わたしはわたしたちの街が住みやすいと感じていて。望遠洞。孔徳で住めっていわれても、わたしは嫌。ビルがとても多いし。そこは会社がそこから近いひとが住むでしょ」（イ・ミンジョン／女／31）。クィアの住民たちがふだん「わたしたちの街」と想定する麻浦には、アパートと高層ビルが建ちならぶ地域は含まれない。高級化されたセキュリティシステムにより、安全を保障された孔徳洞のアパートの住民たちはクィアの人びととは異なり、一定水準以上の資本をもつ人びとであり、居住地を資産に結びつける人びととして分類される。「孔徳駅はサムソンレミアン、ロッテキャッスル⁽¹²⁾があるところなのに、あえて〔デモ候補地に〕入れる必要がある？ あの人たちは麻浦で性的マイノリティが住んでると知ったら、不動産価格が下がるんじゃないかって心配するような人たち」。これは麻浦区庁のホモフォビア的な

(12) サムソン建設とロッテ建設が展開する分譲型マンションブランド。

態度に抗議する一人デモを計画する会議のなかで、流動人口が多い地下鉄駅をデモの場所として設定しようとする意見に対し、あるマレヨンのメンバーが発した効力がある反駁だった。

つまりクィアの住民たちが想起する「麻浦」とは地図上の「ソウル市麻浦区」というよりは、クィアたちのあいだで想像される領土なのだ。ベネディクト・アンダーソン（アンダーソン 2007）の表現を借りるなら、「麻浦のクィアな住民」は想像された共同体として、たがいの親交（communion）のイメージを土台とした、自身たちの自治的な場所を共有しようとする信念をもつようになっていたのだ。だがクィアシティ「麻浦」は想像の産物ではあると同時に、観念的なものというだけではない。想像という実践は特定の社会的、経済的、政治的環境に端を発するためだ（Rose 1990, 발렌타인 2009: 164 [より] 再引用）。したがって、どのようなものが麻浦をクィアの場所たらしめているのか、背景となっているものを検討する必要がある。

2) 低廉な地価と交通の利便性

古来から入り江の文化が盛んな麻浦地域は現在も便利な交通網を有している場所である。地下鉄2号線と5号線、6号線、京義線が通り、最近では空港鉄道が開通されるなど、仁川地域と仁川国際空港からのアクセスも確保されている。また内部循環路、自由路、江邊北路、江南・江北を結ぶ麻浦大橋、西江大橋、楊花大橋、加陽大橋など、道路での移動も便利である。また麻浦区では都心と近接しつつも都心より地価が低く、低所得者たちが居住していた（이지혜 2010: 85）。居住〔エリアとして〕の歴史が長い地域ほど、老朽化した家屋や不良住宅がひしめき合っている。とくに望遠洞、合井洞、上岩洞、城山洞一帯は、従来から浸水被害のある地域であり、いくども水害を経験してきた（ibid）。2007年頃に弘益大学校周辺の賃貸料が大きく上昇するなか、その間低く評価されてきた望遠洞、合井洞、東橋洞、延南洞などの賃貸料も比較的にかなり上がった状態ではあるが、この地域は長い間暮らしてきた人びとからすれば、「とても暮らせない街」として認識されている（チェ・ドンミ／女／43）。この地域の低価な賃貸料は交通の便とともにクィアな住民たちが居住するようになるにあたって重要な要因として働き、隣接する大学街で「いわゆるフェミニズムとかそっち方面」であるものの、その賃貸料を支払うことができなかつた人びとを吸い込む条件となった（ヤン・スンヨン／女／43）。

麻浦区の賃貸料がかなり上がる前に引っ越してきたインタビュー参加者たちは、賃貸料と通学あるいは通勤とのかかわりで居住地を選択する傾向をみせた。人びとはとくに、賃貸料について強く意識していることを明らかにした。今日の住居問題はおおむね普遍的に共感できる問題ではあるが、とくに非婚女性にとってはかなり切迫した問題だ。男性と女性の賃金

格差が厳然とあるなかで、現実に女性が一人の力でまとまったお金を用意することは容易ではないためである。また結婚を契機に両親からの支援あるいはチョンセローン⁽¹³⁾をとおして住居を用意することが相対的に容易な異性愛夫婦とは異なり、結婚制度から外れている同性カップルの場合は、全面的に自身たちの力で費用を繕わなければならない。したがって賃貸料は独立して暮らすクィアたちにとって、居住地を選択する際の重要なものとなる。「結婚をするってなったら、いずれにせよ結婚資金を用意するじゃないですか。チョンセを両親たちが肩代わりしてくれたりしますが、同性カップルの場合はほとんどないから…二人が力を合わせてチョンセの家を探して暮らすことよりも、二人で月払いの家賃を支払って住むケースが多いと思います。けど家賃も高いから、最近は」(チョ・ユンジュ／女／36)。

だが麻浦のこのような立地条件は市民団体たちのあいだで新たな巢となる要因にもなった。近年ソウル市内にまばらに広がっていた諸団体が麻浦に移動する傾向をみせている。参与連帯、経済実践市民連合など堅牢な市民団体がある鍾路区で実践的に活動する市民団体が二十余であるのに比して、麻浦区は2倍以上の五十余であると知られている。諸団体が麻浦区に押し寄せた理由は前述したように、クィアな人びとが住居地として選択した理由とそれほど大差はない。業務上国会にしょっちゅう行く必要がある市民団体は、麻浦へ移動してから〔国会議事堂がある〕汝矣島へのアクセスが有利になるという長所を有するようになった。最近では望遠洞などの賃貸料が上昇したとはいえ、他区に比べれば安いほうである。

麻浦区に移動した諸団体のなかではクィアやフェミニズムの関連団体も含まれていた。2006年以降韓国女性民友会、オンニネットワーク、韓国性暴力相談所、韓国レズビアン相談所、韓国性的少数者文化人権センターなどが相次いで麻浦に事務所を置き、2013年にはもともと忠正路に位置していた同性愛者人権連帯も麻浦に移転した。これらの団体は麻浦区のなかでも弘大入口と合井洞、城山洞に位置しており、クィアの住民たちが「わたしたちの街」と認識している範囲と一致している。実際、団体を立ち上げる時、どの地域に事務所を構えて活動するのは、賃貸料と交通の便といった立地条件のみならず、団体の性格によって左右されるものだ。性的マイノリティの人権について連帯できる団体が寄り集まるようになった点は、麻浦を「新たな気流が流れる場」(ハン・チェユン／女／43)として予感させた。

(13) チョンセとは、賃貸契約時に保証金を支払い毎月の家賃は支払わないという韓国特有の不動産契約システム。一例に2023年12月現在の望遠洞近辺の二人居住用の物件(約35㎡)のチョンセは、約2000万円～3000万円程度の相場である。このように保証金が多額であるため、銀行から巨額のローンを借り入れする他ない状況がある。

3)「弘大ロマン」と新たな気流の形成

「初めて住む家を決めるときの条件が、そういうのがあったんです。弘大に対するロマン」(チョ・ユンジュ／女／36)。「偶然いちばん条件に合う家が城山洞のほうに出ている、ちょうどうまくいったって感じです。もともと、好きではあったんです。うわ、わたしたちホンティズン(訳注——弘大の住民)になったわけ? って言いながら」(ソ・ユギョン／女／36)。あるカップルは、2006年に同居する家を探したとき、賃貸料と職場からの距離を考慮して城山洞を選んだと言いながら、内心で抱えていた「弘大に対するロマン」も家を借りるときの条件として作用したと告白した。また2010年に麻浦区合井洞に引っ越したインタビュー参加者は当時の合井洞の賃貸料が上昇しはじめたときであったにもかかわらず、合井洞近辺で物件を探したという。「かなり上がりつつあったときだったけれど、どうしようもないから。ロマンが、ロマンもあるけど、そっちのほうで住んでいる人が多かったから、あえて他の場所に家を借りないといけないみたいな考えが…」(キム・ソンヨン／女／36)。弘大エリアはレズビアンバーやクラブなどがある場所で、クィア文化に関連したイベントをするための場として利用されてきたという点で女性のクィアたちのあいだで「メッカ」の位相にある場所だ。だがレズビアンバーの存在が、女性のクィアたちをして弘大をはじめとする麻浦を好む直接的な要因にはならない。「Lバーだったりクラブが多いからというよりは、他の文化的なものが…」(ソ・ユギョン／女／36)。「実際レズビアンバーといっても数が多いわけではないし…昔はしょっちゅう通っていたけれど、レズビアンバーが特別におもしろかったり色々あつたりするわけじゃないから。正直うるさいから行かないんです」(ヤン・スンヨン／女／43)。ゲイバーとは異なり、店舗が多くなく規模が小さく、種類も多様でないレズビアンバーは30代から40代の女性たちにとっては「うるさいから」行かない場所であり、このような遊びよりは弘大そのものに魅力を感じたという回答が多かった。そうであれば、人びとが胸に秘める、弘大に対する「ロマン」とはどうやって生まれたのだろうか?

1970年まで弘大エリアは典型的な農村風景が広がる居住エリアで、1990年代前半まで平凡な大学街以上の景観はなく、むしろ近隣の新村と梨大前の人気に隠れて注目を浴びることのない場所だった。1980年代末に弘益大学校が美術大学特性政策を発展させ、現在の弘大エリアの形成に影響を及ぼした。このような流れに便乗すべく美術入試塾が弘大前に入居しはじめ、在学生たちは大学周辺に作業室を設け、持続的な活動をおこなった。したがって弘大周辺では美術学校と作業室、学生たちに必要な美術関連書店と画材店などが現れ、新たな場を形成するようになった。また若い美術家たちは作業室をバーやカフェに改装し営業するなど、産業エリアも美術空間として知られるようになった。1980年代後半から新村の賃貸料上昇にしたがって、新村一帯のライブカフェが弘大エリアに移動しはじめ、1990年代半

ばには弘大前のライブクラブやインディーバンドが本格的に注目を浴びるようになり、弘大エリアには次第に公演とパフォーマンス、展示などの芸術活動のための商業空間が形成された。以降ダンスクラブ文化が広がるなかで、弘大エリアの流動人口が急増し、商業施設が次々に建てられ、今日のような景観をなすようになった(옥은실 2009; 김나이 2011)。

1990年代後半に主に新村に集中していたレズビアンバーが次第に弘大エリアに移動するようになったこともこのような変化と重なり合っていた。たとえ国内最初のレズビアンバーとして知られていたレスボスが麻浦で生まれたとはいえ、1990年代延世大と梨花女子大の同性愛およびフェミニズムにかかわる活発な言論活動と関連してレズビアンバーは新村の商業エリアに店舗を構えていた。だが弘大エリアの商業圏が次第に浮上してくると、新村の商業エリアがやや不振となり、新村にあったレズビアンバーもこのような雰囲気の影響を受けて、2000年頃にひとつふたつと店を閉じるようになった。新村で中心的なレズビアンバーであったラボリスのオーナーは店舗を一時閉店し、弘大エリアで営業を再開した。これが弘大エリアでの最初のレズビアンバーとなった。当時は「芸術、音楽をやる人たちの特別なエリアのように感じられた」場所だったが、あたかも弘大エリアに商業圏が移動する流れをあらかじめ読んでいたかのように、ラボリスのオーナーはバーを再開するとき、無理をしても弘大エリアで場所を探したという。多様な人びととクラブが存在し、躍動感がある「弘大文化」にレズビアン文化も加わらなければと考えたためだ(김희연 2004: 43)。ラボリスの存在は、弘大でレズビアンバーが密集することになるのに決定的な役割を果たした。大型のバーであるラボリスに多くの人びとが移動するようになり、その周辺に小さなバーが集まるようになったのである。

だがラボリスのオーナーが話すように「弘大文化」とは、単純に弘大エリアの商業圏が発展したことだけで広がったものではない。それ以前から存在していた芸術的でありつつ自由で非主流的な雰囲気が多くの人びとをこの地域に引きつけ、社会的少数者にあたるクィアたちにとっても、このような雰囲気が魅力的に感じられたからであると思われる。実際に弘大前をぶらついてみると、他とは異なり、独特なファッションを身にまとう人びとがすぐに目につく。他地域であれば白眼視されるような過激なヘアカラーやタトゥーやピアスなども弘大前では受けいれられる雰囲気であり、むしろ個性的な表現として受けとめられる。多様なファッションが許容される点は一方でクィアたちが自由に街を闊歩できることともかかわる。とくに社会で規定されるジェンダー役割に抵抗を感じるブッチ¹⁰や FtM (female to male) トランスジェンダーの場合、身体的な性と服装が一致しないという理由で変わった視線を受けることがあるが、弘大前では個性として尊重され独特な人を排除することができない雰囲気があるため、そのような視線からより自由になれる。「弘大ではなにをしても許さ

れる雰囲気があります。おじいさんが薄ピンクの服を着ていても、あ、これは弘大だからできるんだ、っていうふうを感じるし、それに何か言っていたらむしろ自分がヘンな人に思われる感じ…」(チェ・ドンミ／女／43)。一般的な40代女性たちと異なり、ショートカットでやや男性的な服装をしていたインタビュー参加者は弘大エリアで仕事をするとき、服装を大きく制約されないと話した。独特な服を着ても「あ、やっぱり弘大は違うな」といった肯定的な反応を耳にするためだ。一般的な職業環境では、社会的規範から外れた服装などをすると、逸脱として受けとられやすいが、弘大エリアでは「弘大だから」という理由で個性として許容される。つまり、クィアたちに「ロマン」を抱かせたのは、レズビアンバーの存在があるかないかというよりも、多様性を許容する弘大エリアの雰囲気のためだ。

一時的な出会いを超えて日常生活でマイノリティとしてのアイデンティティを表出し、これとかかわる価値を共有しようとする欲求をもつ女性のクィアたちは「いっぱい住んでいるらしい」といった噂を聞いて、麻浦エリアに引っ越すようになった。すでにフェミニズムおよび性的マイノリティに関連する市民団体が多数移ってきたといううわさが耳に入ってくるようになっただけでなく、民衆の家が建立されるよう基金が生まれているといった知らせもまた、新たな機運を暗示するものだった。麻浦に引っ越して以来、民衆の家を見守り、民衆の家の会員にもなったあるカップルはこれについて「この街はなにかあってもなんとかなる街だ」と表現することもあった。

すでに麻浦では1994年から共同育児協同組合をはじめとして、1999年生活協同組合、ソンミ山毀損対策委員会などをおして「参与と自治のための麻浦連帯」を結成するなど、住民間の多様な共同地域活動が広がっていた。また地域住民間の情報コミュニティを活性化させようと地域文化が共有および促進され、疎外された人びとのメディアへのアクセスを促すようにとの趣旨から2005年からマルチユニット共同体ラジオ放送「麻浦FM」が設立された。ソンミ山マウル⁽¹⁴⁾のような地域共同体運動の成功例は市民社会で地域単位の運動を進めるアイデアを提供することとなった。とくに麻浦FMで注目すべきことは、プログラムのなかでレズビアンコミュニティラジオ放送である〈L洋装店〉と非婚フェミニスト共同体ラジオ放送である〈野生の花茶房〉が含まれている点だ。〈L洋装店〉の制作チームである「レジュバ」はこの間メディアから疎外されてきたレズビアン女性のための放送をはじめようという目的から放送を制作し、〈L洋装店〉という名前は、レズビアンのためにあつらえた放送を目指すという意味から名付けられた。〈野生の花茶房〉は既存のメディアが非婚女性の声を反映していないという問題意識から出発した放送で、「個人的なことは政治的なこ

(14) マウルとは、家族単位の集団が集住しともに生活を営む、産業化以前からの農村共同体村落を指す。

と」という考えのもと、自身の話を共有する方法で番組は進行される。このようなラジオ放送は市民団体ほどの規模でなくとも、地域内の意味あるコミュニティとして機能している。

このように市民団体および地域内の小規模共同体の集中には、人びとが志向するバーについて情報を共有し議論することがより容易となるという長所がある。また活動家あるいは運動団体の目標を支持する人びとが日常的に出会い交流するようになり、ネットワークが形成されるように促す点で、かなり重要なものといえる。運動団体主催や団体を介して知られた小さな集まりなどで仲を深めるなか、従来から麻浦で暮らす人びとが引越しを勧めることもあった。このようにご近所友達となり、たがいの家を行ったり来たりしながら一緒に食事をとったり、趣味を楽しむなど日常生活を共有することは、親密さを維持するというだけでなく、共通する価値に基づく諸実験でもある。たとえば、フェミニストスウィングダンス同好会「スウィングシスターズ」はリーダーとフォロワーが男性と女性とで固定されている既存のスタイルとは異なり、女性たちが自由にポジションを決め、ダンスする同好会だ。またバスケットボールサークル「自信满满シスターズ」はいくつかのフェミニスト団体が性暴力への問題意識を共有し、女性の身体にかかわる議論と自己防衛などのための運動プログラムをおこなうなかで生まれたサークルだ。このように共通する問題意識のもと、連帯できる諸団体が集まっているという点、オルタナティブな共同体を形成しようとする動きが現れる空間であるという点、なによりもそのような気流に人びとが便乗し集まっている点で、麻浦は新たな急進的な政治が試みられる背景として作用するようになった。

6. クィアシティをつくること

1) 有権者としてのクィア

カステル (Castells) は、都市での同性愛近隣地区の形成について、ゲイ男性たちとレズビアン女性との違いを明らかにしながら、男性たちが支配的な空間を追求する反面、女性たちは空間に対する渴望よりもネットワークと諸関係により重きを置いていると主張する。レズビアンたちは「制度的な権力の統制よりも価値の革命により関心」があるため、政治的な目的のために、地理的基盤を獲得しないという (Castells 1983: 140)。理解と欲求、価値に対するジェンダーの差異を主張するカステルに対し、アドラーとブレナー (Adler and Brenner) はレズビアンが異性愛者である女性と同様に男性と比較するとき、経済力が低だけでなく男性の暴力への怖れによって、視覚的に晒されることをはばかるためだと反論する (Adler and Brenner 1992)。つまり空間の占有にかかわる議論は価値の違いというより、ジェンダーにより生じる権力の差異からくるものであり、これを女性たちが物理的空間を占有しようと

する意志の不在とみることは難しい。

性的マイノリティであり女性という位置から、つまり「正常な家族」の範囲から逸脱するとき、かのじょたち自身のための空間を占めることが困難な現状は、多くの人びとが切実に感じている事実である。たとえば、扶養家族がいない満35歳未満の非婚女性は国家が支援するチョンセのためのローンを借りる資格の条件から締め出されているなど、福祉はいまだに正常家族中心の男性生計扶養者モデルを具現している。それだけでなく、正常家族イデオロギーは家族単位でなされる互惠関係にも作用する。「すこし前に兄が結婚したんだけど、両親が家を買ってあげたって」、「結婚するだけの価値があるなあ」。たとえ以前には賃貸料が安かったとはいえ、麻浦エリアの賃貸料が次第に上昇しはじめ引越さなくてはならないという負担と、定住する場所がないことに対する不安を吐露するクィアな住民たちのあいだで、このような冗談が交わされることがあった。今日では住宅難が問題となっているが、〔家は〕結婚という独立の通過儀礼を経た異性愛夫婦が両親からまとまった金額の経済的支援を受けける方法としてある。ごくまれに同性カップルのなかで片方が両親から支援を受け、二人で暮らす家を用意する場合もあるが、これは娘が近いうちに結婚する年齢だと暗黙裡に考えた両親が事前に結婚資金をチョンセ金として与えるケースである。

結婚を完全なる市民となる関門としてみなす社会で非婚男性もまた既婚男性と比べて「不完全な存在」としてみなされうる。だが男女間の賃金格差が発生するという事実、そして女性の昇進は男性に比していまでもなお多くの制約があるという事実を考慮したとき、同じ非婚だとしても男性と女性が直面する現実的な問題は異なってくる。「ゲイたちはあんまり心配してません。家探しの金額が明らかに違うんです」(チェ・ドンミ／女／43)。麻浦エリアで公認不動産仲介士として働き、口コミを聞いて訪れるクィアたちにしばしば対応するインタビュー参加者はこのように話した。かのじょによれば、一部の専門職に従事する女性たちを除いてクィアな女性たちのほとんどが不安定な経済状況にある。一例に、大企業に勤めるかのじょの友人は歳を重ねるにつれ次第に整理解雇の不安感をつのらせ、下請け業者から「裏金を受けとってやりくりしないと、生きていけない」と冗談を口にするということもあったという。「酒を一杯飲めば済むところが、女たちにはそれができないから」(チェ・ドンミ／女／43)。男性の生計扶養者と家族になっていないクィアの女性たちは、よりいっそう経済的に不安定な立場にいることになる。性的マイノリティであっても女性が男性に比べてマイノリティであり、日常的なレベルでの政治に関心を傾ける理由もこのような差異に起因している。

このような問題意識をもつ麻浦のクィアな住民たちは地域を基盤として、性的マイノリティとしての政治的な声を上げようとした。2010年3月、フェミニズムおよび性的マイノリティの人権運動の活動をしたり、それを支持するクィアの住民たち5人があるカップルの

家で集まっていたとき、地方選挙の話題になった。そのなかで、「わたしたちってみんな麻浦に住んでるよね」ということばが冗談交じりに出て、最終的に〔政治活動を〕「本気でやってみよう」という話になった（イ・ミンジョン／女／31）。6月2日の地方選挙を前にし、性的マイノリティであり有権者であることを前面に出した性的マイノリティの立場を踏まえた質疑書を候補者たちに送付することとなったのである。ここに2008年大統領選挙の際にチェ・ヒョンスク陣営で働いていた人びとが加わり、性的マイノリティの政治について当時悩んだ諸点を引き継ごうとした。だがクィアな住民たちのあいだでしばしば口を突いて出る「わたしたちってみんな麻浦に住んでるよね」という言葉が、有力なワードとなるには、実際に麻浦に暮らすクィアな住民の人口がどれくらいかを確認しなくてはならなかった。この5人がすぐさま周囲で暮らしているクィア人脈の目録を作成したところ、100人を軽くこえており、「やっぱり麻浦は変態⁽¹⁵⁾たちの街だった」（ユ・ジウォン／女／31）という確信を得ることとなった。このとき整理された目録から、麻浦レインボー住民連帯の前身である「麻浦レインボー有権者連帯」が構成された。

麻レ連を結成した人たちが「当番」となり、集まりを主導し、麻レ連の会員たちはクィアが暮らしやすい街について議論し、その内容を整理したうえで、各候補者に質疑書を送付した。質疑書を受けとった候補者のなかで、一部は性的マイノリティの有権者の意志を反映するという回答があり、麻レ連の会員と質疑の時間を設けた候補もいた。選挙が終わっても、100人を超えるクィアネットワークが組織されたのにこのまま解消するのは惜しいという意見が集まり、「麻浦レインボー有権者連帯」は「麻浦レインボー住民連帯」となり、親交を深める集まりや日常での性的マイノリティの政治を継続させることとなった。

以降、2012年4月11日第19代国会議員選挙を目前とし、麻レ連は再び「有権者連帯」の姿をなし、「ボートピープルトークショー&有権者パーティー」を開催した。「ボートピープル」という名称は多義的な表現だ。船に乗り海にさまよう難民であるボートピープル(boat people)のように再開発と高額な家賃によりどうしても定住できず、ソウルをさすらう人びとの境遇を言い表した言葉だ。だが一方で、「ボートピープル (vote people)」つまり有権者でもあり、総選挙に向かって積極的に行動するという意志を込めてもいる。「ボートピープル」または麻レ連の会員たちをはじめとし、性的マイノリティや独立生計者や非婚女性たちがつどい、各候補者の公約を検討し候補者たちを招いて質疑の時間を設け、有権者としての立場を候補者たちに伝えようとするプロジェクトだった。

麻レ連のこのような諸活動は「麻浦にクィアがたくさん住んでいる」ということが事実で

(15) 韓国社会のクィアたちはしばしば自虐的に「^{ビョンテ}変態」とみずからを指すことがある。

あることを確認する作業であったのであり、力を集約する基盤としてのネットワークを組織するという成果をあげた。またクィアのアイデンティティがただ私的な領域にとどまるのではなく、地区の有権者としての立場で、制度的な政治へ影響を及ぼそうとする意志がある存在として、その姿を可視化させようとしたという点で意義のある出来事だった。

2) 麻浦の住民としてのクィア

麻浦のクィアな住民たちが麻レ連を推進する原動力はなによりも、街への愛情だ。「住民たちがこのように自分たちの空間をもっていて」(ユ・ジウォン／女／31) 生きている姿と「わたしたち近所のともだち」(ソ・ユギョン／女／36) がいる場所であるから、麻浦はクィアな住民たちにとって、友人同士で共同体をつくる基盤がある場所として認知されている。住民連帯となった麻レ連は多様なイベントをとおして、街のクィアを集める役割を果たす。麻浦エリアに住んでいなくとも、さまざまな経路から麻レ連を知り尋ねてくる人びとも現われ、麻浦エリアのクィアだけでなく、首都圏に住んでいるクィアたちを呼びよせる麻レ連の役割により、従来から麻浦が担っていた「クィアシティ」の性格がよりいっそう強化されることとなった。

毎月1度の集まり、一緒に食事を準備し食べる「クィアナ食卓」は、麻レ連が運営されるのにもっとも重要な柱となった定期的な集まりだ。この会は、一人暮らしの人びとが週末は食事を抜くことが多くなるため、食事をとろうという趣旨でつくられた。場所は、麻浦エリアにある運動団体の空間を間借りした。クィアナ食卓は気楽な雰囲気と一緒にごはんをつくり同じ釜の飯を食う、という側面で新たな会員たちを共同体の一員として引き入れるのに重要な役割を果たした。また自己紹介をするとき、会員たちはしばしば「こんにちは、わたしは望遠洞に住む〇〇です」のように麻浦の住民である、あるいは麻浦エリアをよく訪れることを明かし、このような自己紹介の時間は麻浦がクィアたちが多く暮らす地域であることを再確認する過程でもあった。これにより、しばしば他のエリアに住む会員たちが「わたしも麻浦に住みたい」という反応をみせることもあり、クィアナ食卓では麻浦エリアの毎月の家賃やチョンセだったり、誰かがルームメイトを探しているなどの家に関する情報が行き交うこともある。つまり新たなクィアな住民を引き入れようとするこのような会話は、クィアシティとしての麻浦という場所性を再強化するのである。

定期的な集まり以外にも、趣味の活動を一緒にやろうという提案が出てきて、テーマ別の小さなサークルが生まれることもあった。自転車サークルや、たがいの台所を共有しおかずをつくるサークル、さまざまなイベントを前に生まれる集まりなどは、親睦を深めながら街の情報を共有する場となる。またときに、街で目にしたクィアについての話は、地域とクィ

アのアイデンティティの相関関係を絶えず構成するよう機能する。麻レ連が結成されてから初期の会員たちを中心にクィアネットワークを構成する過程で「麻浦にはクィアたちが多い」というのが事実であることを麻レ連の会員たちは知るようになったが、コミュニティに属さないクィアたちを街で偶然に発見することは、この命題が事実であるということによりいっそう力を与える経験である。たとえば街なかのフライドチキンの店で、窓越しに見える通りすがりの人を見て服装とその人の雰囲気などでクィアであることがわかるや、「あの人、こっち（クィア）だね」「やっぱり麻浦はクィアが多いだけある」といった会話が交わされる。最近訪れた店など街の情報を交換するなかで、「あそこの、〇〇がブッチらしいんだけど?」「うん、わたしもその噂を聞いていって見たんだけど、ひと目みて（頭を縦にふりながら）ああ…」といった噂が立つこともある。このような会話をとおして会員たちは麻浦がクィアの街であるということによりいっそう確信をもち、街に対する愛着をもつようになる。

とくにレズビアン遊び場である弘大と居住エリアの合井洞、望遠洞一帯を運行する麻浦09番バスと麻浦16番バスは俗称「休む間もなくゲイレーダー¹¹がまわる場所」（ユ・ジウォン／女／31）だ。これらのバスは、クィアたちの遊び場を通過するバスという意味で「クィアバス」として話を通じるものでもある。麻レ連ではやや暗示的に広告バナーや性的マイノリティを象徴する小さなレインボーのロゴを使用し、マウルバスに広告を掲載し、これにより麻浦にひっそりと暮らすクィアたちが麻レ連の存在を認知して、麻レ連を中心にしたネットワークが拡大することを期待した。広告は2011年6月15日から3か月間、7台のマウルバスに掲載された。性的マイノリティに対して無知な一般の人びとにはさして影響しなかったが、広告に接したクィアたちをはじめとして内側からの連帯感を植えつけるのに、十分な効力があつた。なおかつ異性愛が前提とされた日常空間で「クィア」であることを可視化させることで、内側から亀裂を生み出す試みであつたともいえる。

街のイシューとなつていたホームプラス⁽¹⁶⁾合井店のテナント入居に対する闘争への麻レ連の参加は、よりいっそう具体的な実践であつた。クィアな食卓の準備で買い出しをする際にも大型マートより望遠市場を利用する麻レ連は、2012年合井ホームプラスのテナント入居への反対文化祭に参加し、麻レ連の名前でホームプラス入居撤回を求める横断幕を掲げるなど、地域で共有されている問題意識に協力しようとした。このようななか、座り込みの現場にいた市場の商人たちと出会い、対話する機会をもつことで商人たちもまた麻浦エリアのクィアの存在を認知していることを確認する契機となつた。当時麻レ連の会員たちと出会つたある商人は、「女だけが行くそういう場所があるとは知っている」、「女同士でよく遊んで

(16) チェーン展開する大型スーパーマーケット。

いるらしい」と話した（キム・ソンヨン／女／36）。

実際に麻浦のクィアな住民たちが住んでいることは、クィアコミュニティ内部だけでの噂にとどまることなく、麻浦で暮らす他の住民たちのあいだでもある程度は知られていた。2013年1月、麻浦で毎年開かれる地域団体の新年会で、ある異性愛夫婦は麻レ連が持ち込んだチラシをみては「麻浦FMでもなんか、こういう女性たちがやってるそういう番組があるじゃないですか？」という反応をみせた（キム・ソンヨン／女／36）。

だがクィアの存在を地域のなかで全面的に可視化する試みは、長い間黙認されてきた異性愛主義を暴露する契機となった。マウルバスの広告よりいっそう拡張したかたちで、地域の広報板に麻レ連の存在を知らせる広告の横断幕をかけようというプロジェクト、「横断幕大作戦」は麻浦区庁からの反対にぶちあたった。「LGBT、いまここにわたしたちが暮らしている」、「いまここを通り過ぎる人、10人のうち1人は性的マイノリティだ」という横断幕の文字を、麻浦区庁側は「大人たちが不快に思われる」、「青少年によくない」といった理由をあげて掲載を許可しなかった。麻浦区庁は、「ここ」という文字を指し示した指の絵を「嫌悪的である」と問題視した。これに対し、クィアな住民たちは性的マイノリティが「ここ」、つまり「麻浦区」という地域に住んでいる点を問題視したものであると述べ、〔この麻浦区庁の反対を〕一般の人びとが性的マイノリティと同じ空間に存在していることを受け入れることができない事例として解釈した。成人であるにもかかわらず「大人たちが不快に思われる」という言葉を耳にしたクィアの住民たちは、ここでの「大人」、つまり婚姻をとおして市民権を得た大人たちから除外されていたわけである。

麻浦にある既存の地域共同体で、クィアの住民が疎外される同様の文脈があった。ある40代のレズビアンは地域共同体の集まりで「結婚されたら旦那さんも一緒に来るように。共同体を発展させようとするなら、男が多くない」という意味を含んだ言葉を聞いて不快に感じたという。共同育児をつうじた子どもたちの養育をはじめとした共同体を形成し、これを「マウル」としてかたちづくる特性がある既存の地域共同体は家族中心的な性格が強く、同性愛という性的指向あるいは非婚という生き方に対する考慮が至らない環境だった。さらには共同体で夫の役割の男性が必要だとする家父長的な考え方は、共同体への権利に対する女性と男性ともに同等なアクセスを排除するものだった。

だが「自身たちの空間に対する正当な確保への衝動は、急進的な闘争への想像と運動を呼び起こす」（Munt 1998: 3, 발렌타인 2009: 391〔より〕再引用）。麻浦のクィアな住民たちはこのような社会的排除と不可視性に対し、社会的な所属を主張する運動を展開した。ここでは麻浦に居住しないクィアたちも参与し、麻浦区庁に請願の電話をかけ、団体レベルでの抗議書送付、麻浦区庁前でのリレー1人デモなど、多様な方法で意思を表明した。また恩平区、

城北区など他地域の大学の性的マイノリティサークルが麻レ連を支持し、クィアが存在を可視化する横断幕をかける運動を展開することもあった。異性愛的ヘゲモニーに挑み、公にクィアのセクシュアリティを遂行するこのような運動は、クィアのための空間を創出することとなった。なによりも、性的マイノリティの可視化が本格化した場所という点で、麻浦の「クィアシティ」としての象徴性を強化することとなった。

以降、性的マイノリティに対する認識が不足していた麻浦の既存の地域共同体で新たな変化が起こることもあった。カミングアウトしたレズビアン活動家が麻浦の民衆の家の代表に選出されたことで、民衆の家が包容する民衆のなかに、性的マイノリティが含まれるという象徴性を抱えることとなった。またソンミ山マウルは横断幕の一件により、地域のなかのクィアナ住民たちの存在をこれまで以上に認知するようになり、ともに共同体を牽引する一員として受け入れられるようになった。社会的地位および志向する価値の違いにより、長い間同じエリアでも麻レ連を中心としたクィアの住民たちは既存のマウル共同体を率いる住民たちと接点をもつことができなかったが、性的マイノリティの可視化のための運動は地域のなかのクィアたちの能動的な実践を周知させる結果を生んだ。いまとなつては家族中心的な共同体内部でも、これまでの限界を認識し、性的マイノリティの人権への配慮が必要であることを感じている。このような変化は、麻浦がクィアの領土であるということがクィアコミュニティ内部だけで共有されている想像というだけでなく、実際に麻浦エリアを基盤とするクィアナ政治の勢力を確保することで発展できる兆候のように思われる。

7. 結論

2013年第14回クィア文化祝祭は「The Queer: わたしたちがいる」というテーマで、麻浦区西橋洞に位置する「弘大歩きたい通り」で開催された。以前のクィア文化祝祭は鍾路で開催されていたが、クィアが暮らす空間として政治的勢力化の中心として麻浦の象徴性が強化されるにつれ、このような変化が現れたのである。このようなスローガンでクィアたちは性的マイノリティのアイデンティティが私生活の権利問題でなく、大衆となるための自由の問題であることを宣言した (Berlant and Freeman 1993: 198, 발렌타인 2009: 392 [より] 再引用)。本論文は空間に対するアプローチをとおして、韓国社会のコンテクストで性的マイノリティのアイデンティティが有する意味とそのようなアイデンティティをもつ人びとの日常的で政治的な実践を探求しようとするものだった。とくに性的マイノリティに対する支配的な認識から相対的に疎外されてきたレズビアンの女性たちが空間を占有するために能動的な実践を図った点に注目した。

以前からクィアの文化は特定の場所を拠点としてかたちづくられてきたという点で、空間との密接な関係がある。だが一時的に利用できる産業エリアという限界を超えて、空間を新たに占有しなくてはならない必要性に頭を悩ませるなかで、レズビアン活動家たちが中心となって麻浦エリアの再発見がなされた。麻浦は低価な賃貸料と交通の利便性、多様性が許される雰囲気により、早くからクィアな女性たちのあいだで居住地として好まれ、性的マイノリティの人権運動を支持する市民団体が事務所を構え、地域共同体の運動がなされてきた場所である。権力は、ソウルの周辺部である麻浦エリアにクィアな人びとを支持する活動家たちがそぞろに定着するようになるのに作用した。だが他方でかれらの地域への定着と地域を基盤とする社会的実践は、性的マイノリティの日常的な可視化と政治的勢力化を推し進める試みとなった。つまり、権力の作用にはすでに抵抗の可能性が内包されていたということである（平冢 2004）。

麻浦のクィアおよび非婚女性ネットワークは日常的な生における「かのじょたちだけの豊かな内側世界の創造」でもあるが、他方では有権者として行動しつつ、「制度的な権力の統制」を試みることもあった。また地域の性的マイノリティの存在を公共空間で可視化させようとする諸実践は、既存の社会の異性愛的ヘゲモニーを暴く手段となり、さらには「クィアの領土」という象徴性を麻浦エリアに付与する実践として作用した。この事例には、これまで非可視化されていたマイノリティのアイデンティティが、物理的な空間や基盤との相互作用をとおして可視性を獲得し、さらには空間を新たに構成したという点で意義がある。

原注

* LGBT はレズビアン (lesbian)、ゲイ (gay)、バイセクシュアル (bisexual)、トランスジェンダー (transgender) という 4 単語の頭文字をとってつくったもので、同性愛者、両性愛者、トランスジェンダーを通称するとき用いる略語である。“LGBT”, 性的マイノリティ事典 http://kscrc.org/bbs/zboard.php?id=press_dictionary 2015 年 1 月 11 日 閲覧。Copyright (C) 한국성적소수자문화인권센터, 2002-2008. ※本引用表記は、韓国性的マイノリティ文化人権センターで提示した様式にしたがって作成した（以下、同一）。

** 本稿は研究者の修士論文（강오름 2013）を縮約、補完した内容である。有益で生産的な論評をくださった 3 名の審査委員の方々に感謝を申し上げる。

*** 韓国学中央研究院韓国学大学院人類学専攻。

1 これはチャールズ・テイラーに代表される自由主義的多文化主義に対する批判と文脈を同じくするものである。テイラーは西欧で 18 世紀にはいり階級という位階秩序が崩壊し「個別化されたアイデンティティ」が浮上したが、これに根幹を置く差異の政治 (politics of

difference) が看過されていると主張した。したがって彼は個人と集団の差異に対する承認を要求する (Taylor 1994)。しかしこのようなアイデンティティの発現には他者との対話 (dialogue)、つまり主流社会同様に他者の役割がとくに重要だ (오승은 2012: 7)。このような「対話」で承認する主体と承認される対象間の権力関係が起こりうることをテイラーは看過した。「黒人あるいはゲイになる妥当な方法が存在し、充足させられないといけないと思う期待と欲求が存在しなくては」というように、特定の文化に対して固定観念を形成するばかりでなく、その文化に対する「承認」の過程で固定された台本 (script) を強要しようといった批判はこのような文脈から出てくるものだ (Appiah 1994: 162-163)。

- 2 クィア (queer) は、本来「異常な」あるいは「奇妙な」という意味で性的マイノリティを卑下する意味が強かったが、1980年代同性愛者の人権運動で新たな傾向が生まれ、むしろ堂々としたアイデンティティを意味するようになった。性差別と抑圧を生む主流社会の「異性愛中心主義」を排撃し積極的にみずからを「クィア」であると呼称したのだ。筆者と出会った人びともまた日常的にみずからを「クィア」だと表現していた。“퀴어”, 성적소수자사전 http://ksrc.org/bbs/zboard.php?id=press_dictionary 2013년 3월 13일 Copyright (C) 한국성적소수자문화인권센터, 2002-2004.
- 3 本稿に含まれる内容は、2013年4月までにあった出来事である。
- 4 男性会員たちも活動しているにもかかわらず、情報提供者たちの性別が女性に限定されている理由は、麻レ連の結成をはじめとして、活動の大部分が女性たちの積極的参加によるものだったためである。
- 5 主にクィアアイデンティティはそれが形成されるために特定の空間に依存するという点において、本質的に空間的なもので (발렌타인 2009: 15)、このような社会的・性的自由の空間としてみなされてきたのは都市空間だ (Johnston and Longhurst 2010: 80)。例えば、歴史学者アルドリッチ (Aldrich) は古代から現在まで同性愛者のアイデンティティは都市という環境で表れやすかったと主張する。アルドリッチは、小村よりもパートナーの選択の幅がより大きく、匿名性が高い群衆が存在するという点で都市をして同性愛者アイデンティティと密接な関係を結んできたという (Aldrich 2004)。
- 6 〈버디〉 3호 (1998년 5월).
- 7 1970年代明洞の「シャネル」をはじめとする女性専用茶房の場合、当時の明洞で威勢を振っていた組織暴力団が運営する店舗もあったが、これらは女性たちが男性のような服装と行動をすることを不満に思い、追い出すといった悪行を働くこともあったという。웹진 〈레인보우링〉 제 2호 (2009년 7월 28일) <http://rainbowring.tistory.com/35>
- 8 〈버디〉 2호 (1998년 4월).

- 9 〈LGBT 인권 포럼 자료집〉(2009년).
- 10 부치 (butch) は外見や言葉遣い、行動が男性らしさを伴うレズビアンを指し、反対のことをフェム (femme) といふ。“부치”, 성적소수자사전 http://ksrc.org/bbs/zboard.php?id=press_dictionary 2015년 1월 11일 Copyright (C) 한국성적소수자문화인권센터, 2002-2004.
- 11 これはゲイ (gay) とレーダー (radar) からなる造語で、性的マイノリティがたがいを認識する能力をさす言葉だ。

参照文献

- 강오름, 2013, “LGBT, 우리가 지금 여기 살고 있다’: 현대 한국의 성적소수자와 공간,” 한국학중앙연구원 한국학대학원 석사학위논문. (カン・オルム, 『LGBT, いまわたしたちがここに暮らしている』——現代韓国の性的マイノリティと空間』韓国中央研究院韓国学大学院修士学位論文.)
- 김나이, 2011, “Anchor 문화시설 도입을 통한 복합문화공간 활성화 방안에 관한 연구: 마포디자인특정개발진흥지구 (홍대지역) 를 중심으로,” 홍익대학교 건축도시대학원 석사학위논문. (キム・ナイ, 『Anchor 文化施設導入を通じた複合文化空間活性化法案に関する研究——麻浦デザイン特定開発振興地区 (弘大地域) を中心に』弘益大学校建設都市大学院修士学位論文.)
- 김희연, 2004, “한국의 레즈비언 놀이문화 연구: 클럽과 바에서 드러나는 소수문화적 특징을 중심으로,” 한양대학교 대학원 문화인류학과 석사학위논문. (キム・ヒョン, 『韓国のレズビアン遊び文化研究——クラブとバーで現われるマイノリティ文化の特徴を中心に』漢陽大学校大学院文化人類学科修士学位論文.)
- 린다 맥도웰, 2010, 『젠더, 정체성, 장소: 페미니스트 지리학의 이해』, 여성과 공간 연구회 역, 파주: 도서출판 한울. (リンダ・マクドウェル, 『ジェンダー・アイデンティティ・場所——フェミニスト地理学の理解』.)
- 미셸 푸코, 2004, 『성의 역사 1: 앎의 의지』, 이규현 역, 파주: 나남출판. (ミシェル・フーコー, 『性の歴史1: 知の意志』.)
- 박인권·이선영, 2012, “서울의 저항과 대안의 공간 및 운동 변화 분석,” 『공간과사회』42: 5-50. (パク・イングォン・イ・ソニョン, 『ソウルの抵抗と代案の空間および運動の変化の分析』『空間と社会』.)
- 박지환, 2005, “분당신도시의 사회적 생산과 구성: 계급-공간의 사회문화적 형성에 관한 연구,” 『한국문화인류학』 38(1): 83-123. (パク・ジファン, 『分唐新都市の社会的生産と構成——階級-空間の社会文化的形成に関する研究』『韓国文化人類学』.)

- 베네딕트 앤더슨, 2007, 『상상의 공동체: 민족주의의 기원과 전파에 대한 성찰』, 윤희숙 역, 파주: 나남출판. (ベネディクト・アンダーソン, ユン・ヒョン스국訳, 『想像の共同体——民族主義の起源と伝播に対する省察』.)
- 서동진, 2006, “ 성적소수자는 민중이다, 시민이다: 날 것의 삶과 정치적인 삶,” 『황해문화』 50: 377-386. (ソ・ドンジン, 「性的マイノリティは民衆だ、市民だ——生けるものの生と政治的な生」『黄海文化』.)
- 안숙영, 2012, “ 젠더, 공간, 그리고 공간의 정치화: 시론 차원의 스케치,” 『여성학논집』 29(1): 157-183. (안·스기온, 「ジェンダー、空間、そして空間の政治化——試論レベルでのスケッチ」『女性学論集』.)
- 오승은, 2012, “ 찰스 테일러의 다문화주의,” 『Homo Migrants』 5(6): 5-10. (오·스운, 「チャールズ・テイラーの多文化主義」『Homo Migrants』.)
- 옥은실, 2009, “ 흥대앞 문화들의 변화에 대한 고찰: 1990년대 후반 이후 흥대앞 다시 보기,” 한국외국어대학교 대학원 신문방송학과 석사학위논문. (옥·운실, 「弘大前文化の变化に対する考察——1990年代後半以降弘大前の再見」韓國外國語大學大學院新聞放送學科修士學位論文.)
- 이서진, 2006, “ 게이 남성의 장소 형성: 종로구 낙원동을 사례로,” 서울대학교지리학과 석사학위논문. (이·소진, 「ゲイ男性の場所形成——鍾路区楽園洞を事例に」ソウル大學校地理學科修士學位論文.)
- 이지혜, 2010, “ 한강변 주거경관의 현대적 변천 과정: 마포진·용산진·한강진 일대를 중심으로,” 한국교원대학교 교육대학원 지리교육전공 석사학위논문. (이·지혜, 「漢江沿岸住居景觀の現代적變遷過程——麻浦鎮、龍山鎮、漢江鎮一帶を中心に」韓國教員大學校教育大學院地理教育專攻修士學位論文.)
- 이해솔, 1999, “ 한국 레즈비언 인권운동사,” 한국여성의전화연합편, 『한국여성인권운동사』 서울: 도서출판 한울. pp. 359-403. (이·해솔, 山下英愛訳, 2004, 「韓國レズビアン人權運動史」韓國女性ホットライン連合編『韓國女性人權運動史』明石書店, 455-510.)
- 이현재, 2008, “ 성적 타자 (sexual other) 가 인정되는 도시 공간을 위한 시론: 매춘 여성의 몸과 섹슈얼리티를 중심으로,” 『한국여성철학』 10:1-26. (이·히ョン제, 「性的他者 (sexual other) が認められる都市空間のための試論——売春女性の身体とセクシュアリティを中心に」『韓國女性哲學』.)
- 정규호, 2012, “ 한국 도시공동체운동의 전개과정과 협력형 모델의 의미,” 『정신문화연구』 35(2): 7-34. (정·규호, 「韓國都市共同體運動の展開過程と協力型モデルの意味」『精神文

- 化研究].)
- 제프리 위크스, 1994, 『섹슈얼리티: 성의 정치』, 서동진·채규형 역, 서울: 현실문화연구. (ジェフリー・ウィークス, ソ・ドン진·첸·큐히ョン訳, 『セクシュアリティ——性の政治』.)
- 조미나, 2001, “사이버 공간에서 동성애자 집단의 소수문화적 특성에 대한 연구,” 전남대학교 신문방송학과 석사학위논문. (초·미나, 「사이버空間での同性愛者集團のマイノリティ文化的特性に対する研究」全南대학교新聞報道学科修士學位論文.)
- 조성배, 2003, “게이 남성의 소비 공간과 몸의 정치학,” 연세대학교 문화학 협동과정 석사학위논문. (초·송배, 「게이男性の消費空間と身体の政治学」延世대학교文化学協同課程修士學位論文.)
- 질리언 로즈, 2011, 『페미니즘과 지리학: 지리학적 지식의 한계』, 정현주 역, 파주: 한길사. (ジリアン・ローズ, チョン・ヒョン주訳, 『フェミニズムと地理学——地理学的知識の限界』.)
- 질 발렌타인, 2009, 『사회지리학』, 박경환 역, 서울: 논형. (질·ヴァレンタイン, 박·큐온판訳, 『社会地理学』.)
- 주디스 버틀러, 2008, 『젠더 트러블』, 조현준 역, 파주: 문학동네. (주디스·바틀러, 초·히ョン준訳, 『ジェンダー・トラブル』.)
- 한채윤, 2011, “한국 레즈비언 커뮤니티의 역사,” 『진보평론』 49: 100-128. (한·첸윤, 「韓國レズビアンコミュニティの歴史」『進歩評論』.)
- Adler, S. and Brenner, J., 1992, “Gender and Space: Lesbians and Gay Men in the City,” *International Journal of Urban and Regional Research* 16: 24-34.
- Aldrich, R., 2004, “Homosexuality and the City: An Historical Overview,” *Urban Studies* 41(9): 1719-1737.
- Appiah, K. A., 1994, “Identity, Authenticity, Survival: Multicultural Societies and Social Reproduction,” in A. Gutmann, ed., *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton: Princeton University Press. pp. 149-164.
- Berlant, L. and Freeman, E., 1993, “Queer Nationality,” in M. Warner, ed., *Fear of a Queer Planet: Queer Politics and Social Theory*, Minneapolis: University of Minnesota Press. pp. 193-229.
- Bourdieu, P., 1977, *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Castells, M., 1983, *The City and the Grassroots*, Berkeley, CA: University of California Press.
- Johnston, L. and Longhurst, R., 2010, *Space, Place, and Sex: Geographies of Sexualities*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

- Lawrence-zúñiga, D. and Low, S., 2003, "Locating Culture," in D. Lawrence-zúñiga and S. Low, eds., *The Anthropology of Space and Place: Locating Culture*, Malden: Blackwell Publishing. pp. 1-47.
- Mitchell, D., 2000, *Cultural Geography: A Critical Introduction*, Oxford: Blackwell.
- Munt, S., 1998 "The Lesbian Flaneur," in D. Bell and G. Valentine, eds., *Mapping Desire: Geographies of Sexualities*, London: Routledge. pp. 104-114.
- Plummer, K. (ed.), 1980, *The Making of the Modern Homosexual*, London: Hutchinson.
- Rose, G., 1990, "Imagining Poplar in the 1920s: Contested Concepts of Community," *Journal of Historical Geography* 16: 425-437.
- Taylor, C., 1994, "The Politics of Recognition," in A. Gutmann, ed., *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton: Princeton University Press. pp. 25-74.
- Weston, K., 1991, *Families We Choose: Lesbians, Gays, Kinship*, New York: Columbia University Press.

〈資料〉

雜誌

1998 년 4 월 〈버디〉 2 호 , 도서출판 해울 . (『BUDDY』 2 호.)

1998 년 5 월 〈버디〉 3 호 , 도서출판 해울 . (『BUDDY』 3 호.)

ウェブマガジン

2009 년 7 월 28 일 〈레인보우링〉 제 2 호 (『레인보우링』 第 2 号) (<http://rainbowring.tistory.com/35>).

団体資料集

2009 년 〈LGBT 인권포럼자료집〉 , 무지개행동네트워크 . (『LGBT 인권포럼자료집』, 虹行動 네트워크.)

シンポジウム資料集

이송희일, "한국에서 동성애자 인권운동이 불가능한 이유 5 가지," 〈1999 년 6 월 한동협 1 주년 기념식 심포지엄 자료〉(イソン・ヒイル, 「韓国で同性愛者人権運動が不可能な 5 つの理由」『1999 年 6 月韓同協 1 周年記念式シンポジウム資料』) (<http://my.dreamwiz.com/gayfics/mirror.html>).

用語事典

성적소수자사전 (性的マイノリティ事典) (http://kscrc.org/bbs/zboard.php?id=press_dictionary).